

時事評論
現代を
読む
4

森本あんり

(国際基督教大学教授)

2009年と10年
——エディンバラの歴史的記念

研究休暇で秋の日々をエディンバラ大学神学部で過ごした。エディンバラは宗教改革者のジョン・ノックスが活躍したところで、かつてはジュネーブと並ぶカルヴィニズムの二大拠点であった。しかしこの両都市は、次の時代には合理主義の拠点となり、それぞれルソーとヒュームを生むことになる。カルヴィニズムは、つくづく合理主義と相性がよいらしい。

日々が彼の進化論の発展に重要な鍵を提供した。

というのも、当時のエディンバラはまさに合理主義に開かれた新しい学問の中心地で、「近代のアテネ」と呼ばれていたからである。オックスフォードやケンブリッジは伝統主義で、英国教会信条への同意を求めたが、エディンバラにはそれがなかったし、何よりも他所にはいなかったラマルクの弟子や地質学者がいた。しかも1820年代のエディンバラは、鉱山投機の暴落をきっかけに、ちょうど近年のような国際金融危機に見舞われていた。多くの人が破産して消えてゆくを見て、ダーウィンは適者生存と自然淘汰の厳しい現実を思わずにはいられなかったに相違ない。

体験であった。学部長に伺ったところでは、当初予定されていた100周年の記念大会は、予算の都合がつかず大幅に規模を縮小するらしい。たしかに、エディンバラ会議から開花したエキュメニズムは、20世紀にはシンデレラ姫のように美しくかったが、新世紀が時の鐘を打つ頃には、まったくうらぶれてしまった。今日では世界教会協議会(WCC)も他の国際機関の陰で使命は拡散し、指導者にも恵まれず、発言力は低下している。マクグラスが指摘するように、21世紀世界のキリスト教的一致は、これら前世紀の制度とは別のところに求められているのかもしれない。

エディンバラは、ヒュームの他にアダム・スミスやチャールズ・ダーウィンとも深い関わりがある。2009年はカルヴァン生誕500年で賑わったが、実はダーウィンの生誕200年、彼の『種の起源』出版150年でもあった。ダーウィンは親の定めた路線でエディンバラ大学医学部に入学したが、まったく適応できずに中退、ケンブリッジ大学神学部へ転ずることになる。エディンバラで過ごしたのは2年にすぎないが、その短い

実は、今日のエディンバラ大学神学部もこの時期に生まれている。神学部の歴史はもちろん大学と共に16世紀まで遡るが、スコットラ

ンド長老教会は合理主義への対応で新旧両派に分裂、その離脱した改革派を呼び戻して作られたのがこの新しい神学部だからである。それで人々は今もここを「ニュー・カレッジ」と呼ぶ。

から間借りしているにすぎない。だから、大会議場は年に一度、教会の年次総会の時に開けられるだけなのである。

秋の1日、わたしは特別許可を得てその歴史的な場所に立ってみた。それはめまいを覚えるような

エディンバラ大学神学部の中庭に立つノックス像は、右手を高く挙げて天空を指している。はたして彼は、21世紀の教会にどのような幻を示そうとしているのだろうか。

エディンバラ大学神学部の中庭に立つノックス像は、右手を高く挙げて天空を指している。はたして彼は、21世紀の教会にどのような幻を示そうとしているのだろうか。

エディンバラ大学神学部の中庭に立つノックス像は、右手を高く挙げて天空を指している。はたして彼は、21世紀の教会にどのような幻を示そうとしているのだろうか。